

平成 24 年 10 月

山崎茂幸様
黒川次郎様

孀恋村鹿沢温泉
呉公一郎

孀恋村山小屋とキャベツ畑のご報告その二

冠省 先日の孀恋村に 1945 年から移り住み、本籍地を東京からわざわざ移してさらに原野を国から払い下げを受けて開墾したお話の続きその二をお届けします。

個人的な事に長い報告にて恐縮ですがご容赦の程お願い致します。

67 年前 田代村の部落から 3 キロも奥に入った原野(先住者は野生動物のみ・たぬき・狐・テン・野兎・カモシカ・きじ等)の開墾生活は、生れてから都会から田舎暮らしの経験一度もなしの母親と三人の子供(10 歳・8 歳・4 歳)にとって難行苦行でした。

(思い出すままに書きましたので少々長めになりました、お時間のある時にでもご一読下されば幸甚に存じます)

一番手当てしなければ生活が出来ない用意する事

①雨・風・雪に耐える山小屋の建築

父の友人猪谷六合(いがやくにお)氏の協力をえて簡易小屋を作る。

その後木造二階建の家を建てましたが数年後に火災にて焼失してしまい、再度小さめの山小屋を建てなおし住み着き現在に至っております。

②水源の確保

最初は近くを流れる小川より運ぶ、これが一番大変でした。

数年経ってから山の中を 6kメートル離れたところに湧水水源地を確保、国有地の中にある為国から認可を取り、自前で 6 キロメートル水道管の施設をしました。国有地のなかを通す水路の為営林署から「国有林野使用許可」の認可をとり、現在も 3 年毎の契約更新を続けております。

山の中に住む為の一番の確保は「水」です。

③食料の調達

標高 1000 メートルを越える高地に付き農作物(穀物)にて実の入るものは限られていました。

米・麦は実りません。

実が入るものは、そば・粟・稗・燕麦・大豆・小豆ぐらいでした。

野菜は特産のキャベツ・白菜・ジャガイモ・トウモロコシ(年に 1 回しか収穫できません)

食糧難の時代米を確保するにはおふくろと小三の私が、鳥居峠を不定期便のトラック(幌つき)に乗り継ぎ真田から丸子電鉄に乗り殿城村の知り合いまで物々交換に出向き、わず

かな米を調達して山越えで帰って来ました。一日がかりでした。

おふくろは東京・麹町・洗足しか知らない人で、目黒から高輪迄、現在の聖心女子大学迄人力車で送り迎えがあった家に育ったと聞いています。小柄で140cm40数キロの体ですが何処にそんなエネルギーあったのか？どうして東京に戻らなかったのか？

原点は母方の祖母が戸籍謄本の上では幕臣榎本武陽の妹でありそちらの血筋から来るものかと思ったりしています。

④燃料の確保

薪しかありません 今はプロパンガスのある時代にて到底想像出来ません。

山があるとはいえ道具も無く力もない年齢にて、鹿沢温泉の土屋旅館(主の息子さんが上田中学,現上田高校の先輩)の皆さんに、田代村の黒岩一族の皆様、田代の駐在所のご夫婦に、なにからなにまでお世話になり、本当にいまでも感謝しきれません。

土屋旅館の主を「とうやん」奥方を「かあやん」の呼び方にてお付き合いさせて頂き、今日は吹雪いているから帰れないよ「泊って行きな」にて本当に有難かった記憶が残っています。

⑤灯りの準備

ランプ生活で灯油の確保がこれ又入手困難にて大変でした。

六里(24キロ)離れた長野原町まで一日がかり配給を受けに出かけました。

その後父親も大変なことに気が付き、自己負担にて鹿沢温泉から山の中2kmに電柱とトランスを設置、やっと電気の灯る日を迎える事が出来ました。依って現在も電柱設置使用料を東京電力より僅かですが頂いております。

⑥道路の確保

広大なるキャベツ畑の一番奥に山小屋はあり、どうしても道路の確保は生活必要条件であり、現在も近隣の農家と話し合い応分の負担をして維持しております。

⑦通学の準備

田代村にある孀恋村立小学校田代分教場へ子供の通学準備

小学生5年、3年の子供が未開拓の原野から吹雪の中を通学できるかどうか疑問にも思わなかった時代でした。

幸い田代村の方々(駐在署のお巡りさんご夫婦を含め)、黒岩さん一族、鹿沢温泉の皆様の応援を頂く事が出来無事通学する事が出来ました。

只、名字が「呉」にて排他的な地方にあっては随分と苛められました、田舎には弱い者を助けてくれる強い子がいて守ってくれ、現在の様な陰湿な金銭要求等のいじめはありませんので助かりました。

同封資料

①孀恋村鹿沢温泉にある山小屋のスナップ写真1冊(二年ほど前に写したものです)

母屋、昭和55年(1980年)に建てた物件にて30年を経過し劣化が進んでいます、現在

は人が住んでいない為タヌキが住み付いていると報告を受けています。

別棟の山小屋はシェヌー(フランス語と聞いております)命名され、60年前父親の母校東京大学の学生さんがこんな山奥まで毎年来て下さり、従妹の石黒ひでさん(東大仏文科卒・オックスフォード大学教授、最近まで母校の教授も引受けていましたが高齢に付き最近引退、相当変わった方です)、東大の地震研究室の方々、パラメロン発明考案者の後藤英一(親戚)さん等多数来られておられました、皆様も高齢となられ疎遠になっております。

② 2012年(平成24年)夕刊読売新聞記事

「でかける」に私の家族が住んでいた孺恋村田代部落・鹿沢温泉の一角が取り上げられ嬉しく思いコピーお届けさせていただきます。

現在は近くに「国民休暇村・ホテル」が出来、春秋のハイキングコースとしてNHKの番組にも取り上げられ認められてきてるようです。

お出かけがある時はご一報下さい。

以上